古庄ゆき子先生のこと

安東大隆

古庄ゆき子先生は、本学の前身である別府女子大学を昭和二十八年に御卒業になり、法政大学大学院で委託研究生として、西郷信綱教授の指導を受けられた。

昭和三十三年別府大学講師に任用され、以後、助教授を経て、四十八年より教授となり、平成七年三月の御退職に至るまで、本学に在籍し、研究と教育に従事してこられた。

その御研究の軌跡は年表に示す通りであるが、大きく分類すると二つあるように思う。その一つは初期の御研究がそうであるように、『万葉集』を中心とした古代文学であり、もう一つは「ふるさとの女たち」などにより窺われる女性に関するものである。両者は一見すると無関係に存在するようであるが、決してそうではない。『万葉集』の研究にもその底流には常に、女性研究の視点が持込まれている。社会の反映としての文学、その作品の中に取り扱われている女性も又、当時の人々の考え方の反映にほかならない。女性の生き方を緻密に観察していくという方法は、はからずも当時の社会の矛盾をも指摘してしまうという側面をもっている。このような研究の方法は、在任中一貫して持ち続けられたものであるし、又著書として実を結んでいる。

教育にも一途な情熱を注ぎ続けてくださり、その御薫陶の学生への浸潤はひとかたではなかった。そのことは、本年の二月末に御退職にともなう記念講演と先生を囲む会を開催した時の盛況ぶりに窺えた。小人数の大学であるが、百人余の卒業生が参加し、酒肴には殆ど手を染めることなく、先生との再会を喜び、また、名残りを惜しんでおられる様子を目のあたりにして、その感を深くしたのである。私自身本学に職を奉じて約二十年になるのであるが、職を退く時にこれ程の感動を与え得るだろうかと、否定的に自問した程である。

先生が退かれることにより、戦後の国文学科の歩みを語る人が、いなくなったことになる。寂しい限りである。学科の歴史を語るという意味をもって、先生に「国文学会の歴史」を前号に連載していただいた。

これからの学科の歩みに思いをはせると、予測も出来にくい。学生の興味も多様化しているし、何を求めるかもそれぞれである。しかし、少なくとも、徒に時代の流れに身をまかせて、自己を見失ってはなるまいと思う。常に客観的に真理を見通す目を育てていきたいと思う。そこに文学を学ぶ意味もあろう。

最後になったが、先生の御学問の進展と、御健康を念じてやまない。

（平成七年十二月）

古庄ゆき子先生　略　歴

昭和24年3月　大分青年師範学校卒業
昭和28年3月　別府女子大学卒業　国文学専攻（文学士）
昭和31年4月　法政大学大学院に（指導教授西郷信綱博士）
〜33年3月　委託研究生として在籍

職　歴

昭和24年4月　安岐中学校教諭
〜26年3月
昭和29年4月　別府女子大学国文学研究室助手
〜31年4月
昭和31年4月　法政大学大学院へ委託研究生として出向
〜33年3月
昭和33年4月　別府大学文学部講師
〜39年12月　同
昭和40年1月　別府大学文学部助教授
〜48年9月　同
昭和48年10月　別府大学文学部教授

論文

著書	発行年月日	発行所
女流俳人について	一九五六年	十二月全国国語国文学会
古代文学史の一問題 ―いわゆる「女歌」の発生とその展開―	一九五八年八月	機関誌「文学語学」別府大学紀要第8輯
大伴坂上郎女ノート	一九六〇年九月	日本文学協会機関誌「日本文学」
大伴坂上郎女覚え書	一九六二年	別府大学会機関誌
〝作品に恣意を持ち込まないで読む〟ということ ―一首の歌の解釈をめぐって―	一九六四年六月	別府大学紀要第11輯
石川郎女ノート	一九六四年六月	別府大学国語国文学会誌「別大国語国文学」第5号
石川郎女覚え書き	一九六五年一月	日本文学協会機関誌「日本文学」133号
狭野茅上郎女ノート	一九六五年十二月	別府大学会機関誌「別府大学紀要」第13輯
ノート、カツラギヒトコトヌシノカミ ―その形象化の過程をめぐって―（上）	一九六七年三月	日本文学協会機関誌「日本文学」151号
謡曲「葛城」の後にあるもの	一九六七年十月	別府大学国語国文学会誌「別大国語国文学」第8号
―カツラギヒトコトヌシのもう一つの顔―		別府大学国語国文学会誌「別大国語国文学」第9号
大伴坂上郎女の歌をどう読むか（一） ―類似歌、類想歌を中心として―	一九六八年十月	梅光女学院大学国語国文学会機関誌「国文学研究」第4号
ノート大伯（大来）皇女	一九六八年	別府大学国語国文学会誌「別大国語国文学」第10号
「文学史を書くこと」	一九六九年十月	別府大学国語国文学会誌「別大国語国文学」第11号
自体が芸術作品であってよいか ―三島由紀夫「日本文学小史」批判、特に万葉集評価を中心に―		大分大学国語国文学会誌「国語の研究」第6号
日本女性史における古代末期女性作家の意味	一九七二年六月	別府大学国語国文学会機関誌「別府大学国語国文学」第13号
高群逸枝覚え書き（二） ―平安期女流作家の位置づけをめぐって―	一九七二年四月	別府大学国語国文学会機関誌「別府大学国語国文学」第16号
大伴坂上郎女「怨恨歌」再考のための覚え書き	一九七四年十一月	大分大学国語国文学会機関誌「国語の研究」
古代民謡論	一九七四年十一月	別府大学国語国文学会機関誌「別府大学国語国文学」第16号
祭神歌 ―大伴坂上郎女の歌をどうよむか―（三）	一九七五年十二月	別府大学国語国文学会機関誌「別府大学

大伴坂上郎女像の変化をめぐって（一）　一九七八年二月　国語国文学」第17号

地方女性史　―大分県における働く婦人の歴史―明治期を中心にして―（一）　一九七四・月　別府大学国語国文学会機関誌「別府大学国語国文学」第19号

近代日本女性史の方法試論―最近の方法論論争によって　一九七七年二月　私学研修第65号

富岡製糸工場へ送られた娘たち　一九七八年五月　別府大学国語国文学会機関誌「別府大学国語国文学」第19号

大分県における朝鮮人　一九七八年十二月　佐藤義詮先生古稀記念論集

『万葉の女たち―その創造性の根源を求めて―』　一九八四年五月　新人物往来社刊「近代民衆の記録」10小沢有作編

女性史・女性学　一九八五年　一九六六年二月別府大学国語国文学会

女性史・女性学　朝日ジャーナル編　朝日選書272

明治期大分県の女性　一九八六年三月　「大分県史近代篇Ⅱ」

大正・昭和前期の大分県の女性　一九八七年三月　「大分県史近代篇Ⅲ」

大分県における「教化総動員運動」　一九九〇年十二月　大分県地方史研究会「大分県地方史」

屎葛の歌―万葉集巻十六の歌をよむ―　一九九〇年十二月　別府大学国語国文学会機関誌「国語国文学」第32号

戦後の文学と文学運動　一九九一年三月　大分県史現代篇Ⅱ

解釈の問題一・二　一九九一年十二月　別府大学国語国文学会機関誌「国語国文学」第33号

大伴坂上郎女論　―その位置づけをめぐって　一九九三年一月　別府大学学会誌「別府大学紀要」34号

別府大学国語国文学会小史　一九九三年十二月　別府大学国語国文学会機関誌「国語国文学」第35号

別府大学国語国文学会小史　一九九九四年三月　別府大学国語国文学会機関誌「国語国文学」第36号

☆著書紹介

『ふるさとの女たち―大分近代女性史序説―』

『豊後おんな土工』

『女たちの日本近代』

『大分おんな百年』